

Ⅱ．研修別報告

4．専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会

専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会

キーワード： 高度実践看護師 専門看護師 役割発揮 専門看護師の継続教育

I. はじめに

本学は、平成 21 年度より大学院に専門看護師コースを設け、慢性看護、小児看護、がん看護の 3 分野の専門看護師を養成してきた。専門看護師は、当該専門領域において、卓越した看護の実践、看護職に対する教育、ケア提供者へのコンサルテーション、関係者の調整、実践の場での研究、倫理的調整などの諸活動が遂行できる実践能力をもち、看護現場においてさらなる活動の発展が期待されている。本学では、平成 30 年度までに 15 名の専門看護師が認定され、県内をはじめとする医療機関に送り出してきた。内訳は、慢性看護 6 名、小児看護 3 名、がん看護 6 名である（平成 30 年 12 月現在、岐阜県内では 34 名が活動している：日本看護協会 HP）。

日本看護協会では、専門看護師のレベル保持のため認定更新制を施行し、認定を受けてから 5 年ごとに更新審査を受けなければならない、となっている。各分野において看護のリーダーとして活動する専門看護師は、看護実践の質向上の努力をし、自己の看護実践能力のレベルを維持向上させていかなければならない。更新審査においては、「研修」と「研究」の両分野での一定数の活動実績が必要とされる。「研修」では「専門看護分野に関する最新の情報・知識・技術の修得のための研修プログラムへの参加」「専門看護師事例検討会等の専門看護師および専門看護師教育課程修了者を対象とした研修プログラムへの参加」が推奨されており、資格更新の条件として、研修を積むことが必須である。そこで、本学では平成 28 年度は県内で活動する専門看護師を対象に、研修に関するニーズと活動状況について調査し、平成 29 年度と 30 年度は専門看護師の活動経験が豊富で全国的な活動をしている専門看護師の講演と日々の活動を検討するグループワークによる研修会を開催した。一方、平成 27 年度の調査において事例検討会の要望も確認されており、平成 29 年度から専門看護師 4 名が企画者となり、事例検討会開催に向けて取り組みを開始していた。

そこで、本年度は専門看護師間の相互交流と、資格取得後の看護実践の質向上とスキルアップを図ることを目的に、専門分野を超えた事例検討会を開催した。

II. 担当者

奥村美奈子、布施恵子（成熟期看護学領域）
藤澤まこと（地域基礎看護学領域）
服部律子（育成期看護学領域）
橋本麻由里（機能看護学領域）
黒江ゆり子、茂本咲子（看護研究センター）

III. 実施方法

1. 研修会開催に向けた企画会議

本事業を担当する教員と研修会の企画を担当する専門看護師 4 名で、研修会開催に向けた企画会議を 2 回実施した。

1) 第 1 回企画会議

開催日時：令和元年 5 月 20 日（月）18：30～20：00

出席者：企画担当の専門看護師 4 名、教員 3 名

場所：岐阜県立看護大学 第 2 会議室

【検討内容】

本年度は、専門看護師としての視野を広げ実践能力の向上を図ることを目的に、「倫理調整」に関する事例を用いて参加者全員で事例検討を実施することと、研修会のテーマを「倫理調整の視野を広げよう！専門領域を超えた CNS による事例検討会」に決定した。研修会のスケジュールについては、同日開催となる「看護実践研究学会第 1 回学術集会」との調整によって研修会の時間が 80 分と決定しているため、趣旨説明 5 分、事例を用いたグループワーク 60 分、グループワークの結果の共有と総括を 15 分とした。また研修会の対象者については、昨年度までの実績等を踏まえ、専門看護師に加えて認定看護師やその他看護職者も対象とすることを確認し、同日開催の「看護実践研究学会第 1 回学術集会」プログラムへの案内の掲載、専門看護師への案内状郵送、本学ホームページへの研修会開催案内の掲載によって研修会開催の周知を図ることを決定した。

2) 第 2 回企画会議

開催日時：令和元年 8 月 5 日（月）18：30～19：30

出席者：企画担当の専門看護師 4 名、教員 6 名

場所：岐阜県立看護大学 第 2 会議室

【検討内容】

研修会で用いる事例の内容と当日までのスケジュール及び当日の役割分担を確認した。検討事例は、脳動脈瘤破裂によって寝たきりとなり、気管切開や経管栄養などの医療的ケアが必要となった学童期の女兒の事例で、グループワークでは事例から捉えた課題や必要なケアを視点に検討することを決定した。

グループワークの進行は、事例の説明後にグループメンバーで討議した後、企画者が倫理的問題を考えるための参考資料等を配布・解説しグループメンバーの理解を深めることを決め、グループワークの内容が共有しやすいようホワイトボードに記録しながら進めることとした。

2. 研修会開催の周知

岐阜県で活動し日本看護協会 HP に氏名等が掲載されている専門看護師を対象に、本人と所属施設の看護責任者を対象に研修会の案内を送付した。また、大学ホームページや学内の掲示等により本研修会の周知を図った。

3. 「専門看護師の看護実践の質向上を目指す研修会」開催

開催日時：令和元年9月7日（土）13：30～14：30

（看護実践研究学会第1回学術集会との合同企画）

場所：岐阜県看護大学 講義室 101

1) 研修会の参加者

参加者は22名で事前申し込み8名、当日参加が14名であった。参加者の内訳は、専門看護師7名（慢性疾患看護1名、がん看護4名、家族支援看護1名、精神看護1名）、認定看護師2名（糖尿病看護2名、緩和ケア1名）、専門看護師課程大学院生2名、看護師11名で、他県からの参加者も2名あった。

2) 研修会の内容

参加者を3グループに分け、各グループに企画担当の専門看護師が1～2名ファシリテーターとして加わった。

研修会は80分で、本会の趣旨やスケジュールを説明した後、グループワークを60分実施し、その後15分でグループワークの結果を共有した。グループワークでは提示した事例から捉えた課題や必要なケアについて検討した。グループワークの状況はグループによって多少の差は認められたが、概ね活発に討議されていた。なお、参加者全員に修了証を発行した。

3) グループワークの共有（概要）

（1）各グループからの報告

【1グループ】

- まず、情報の整理が必要と考え臨床倫理の四分割を活用した。その結果、児については言語能力や意向の確認の可能性、元気だったころの状況、家族については生活の状況や意向とその根拠など、多くの情報が不足していた。また、現在の病状や今後の見通しが明確になっていない中で、医療者の考えと本人や家族の意向がずれていることについて話し合った。
- 両親に対して、本当はどうしていきたいのか、医療を拒否するのは何故なのかについて傾聴することが重要であり、また両親以外の家族の状況も確認する必要性を確認した
- CNSからは、両親が状況を受け入れ難い状況において、不足している情報を推定しながら両親から確認し、本人・両親について今がどういった時期なのか、どのような状況にあるかを十分に捉えて家族を支援することが大切であるとアドバイスを得た。
- 両親の支援としては、発病から現在までの経緯や時々抱えた不安などについてどのように対処してきたかを語ってもらい、家族の思いに寄り添いながら、両親の考えを否定せず、一緒に最善の方法を考えることが大切であることを話し合った。

【2グループ】

- 医療者の考えと親の希望に隔たりがあるとことを課題と捉えた。その背景には、急性期を脱した段階で、回復が促進されるように支援し、リハビリを進めながら在宅移行に向かうという大きな方向性は共通しているが、両親にとっては、わが子が突然発症し寝たきりの状況になったことは受け入れ難く、危機状況にあると考えられる。医師からの説明は理解はしているが、それを受容ができない状態にある。こうした両親の現状を看護師が理解をした上で、その思いに寄り添えるアプローチをしなくてはいけないと話し合った。
- 抑制帯についても話題が出たが、どうしても必要な状況であればミトンと抑制じゃなくて、ミトンだけにできないかなど、児のストレスに対してはできることを検討する。また、両親が児に付き添うことで妹は祖父母に頼らざるを得ず、家族全体がストレスフルな状況であると考え、それに対して看護師は話を聴き、必要であれば臨床心理士の介入等を検討するなどの支援も大切ではないかとの意見が

あった。

- ・胃ろうに関しては、経口摂取の可能性、胃ろう造設が一次的なのか永久的なのかについての医師の見解、医師が家族にどのように説明しているかについて、看護師が医師に確認し、現在生じている問題の本質を見極め、各職種が専門性を活かしながらチームで支援する必要がある。そうすることで、両親と医療者間に信頼関係が形成され、在宅に向けて家族と医療者が同じ方向で進むことができるようになるのではないかと話し合った。

【3 グループ】

- ・現在の問題点は、中心になるはずの児にとって害になるようなことが生じていることであると捉えた。それに対して、両親が児の障害をなるべく受け入れていけるように支援することや、児に合った適切なケアができるようになることが目標だと話し合った。その視点から事例を捉え、現在の児の状況を受け入れられない両親が児に対してマイナスの対応をし、その両親に対してスタッフがマイナスのイメージを持っているという状況になっていると考えた。
- ・まず、看護師が両親の思いと頑張りを認め、両親の希望をしっかりと支えながら、両親と一緒に頑張っていこうという姿勢をチームで統一して実践することが重要である。二つ目は、皆が一番大事にしたいと考えている児について、両親と日々一緒にケアを行いながら、児の反応や適切なケアについて両親が判断できるように支援して行くことが大切になるのではないかと話し合った。

(2) 事例提供者による総括

- ・私が捉えた問題は、一つ目は両親が障害受容段階であり患児の障害を正しく理解していないため、児のリハビリケアが行われていないことで倫理的な課題が生じていると捉えた。二つ目は、在宅移行の目的で入所していたが、両親がまったく在宅生活のイメージが出来ていないため、児の医療的ケアを含む日常生活援助を習得できていないということだと考えた。
- ・目標は、一つ目は両親が児の障害を正しく理解でき医療的ケアを習得する、二つ目は両親が在宅生活をイメージでき日常生活の調整ができると設定した。また、スタッフが両親にマイナスイメージを持っているため両親の思いに寄り添う事が出来ていない、否定的に捉えていると捉えた。
- ・医師は医学的視点から、児が歩くことで骨折に繋がるだろうと考え、また誤嚥している状況でアイスクリームを口から摂取することは危険であるため抑制しかないと判断している。このような時は、何が対立し、どこに倫理的な課題があるかを考えながら、ジョンセンの臨床倫理の4分割表などを活用しながら検討していく。その際、日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針などを参考資料としながら意見交換をすると課題が明確になる。
- ・実践の現場では、障がい受容過程のモデルや家族のエンパワーメントモデルなどを用いて事例検討し、またカンファレンスで検討を重ねることで、スタッフで現状を理解し方針を見出していく。
- ・今回の事例検討を通して、多くの意見を得ることができた。

4) 参加看護職の反応・意見

研修会終了後、参加者にアンケート用紙を配付し、20名（内6名は専門看護師）から回答を得た。グループワークについては「とても良かった」14名、「良かった」6名であった。

自由記述の意見は、【他分野の看護師と交流できて良かった】【多分野、他施設の看護師との意見交換によって多様な視点や共通点等、学びを得た】【専門看護師として調整すべきことが明確にできた】【情報を看護にいかすための方法を学ぶことができた】【専門看護師と交流することで学びを得た】といった研修会に参加した学びや交流が図れたことを評価する意見が得られた。また、【自由に発言できる雰囲気良かった】といった研修会の雰囲気を評価する意見や、【専門看護師の活動を具体的に知りたかった】といった要望もあった。グループワークのファシリテーターからは【グループワークにおいて効果的なファシリテーションができなかった】の意見があった（表1）。その他、研修会の運営について、グループ人数の調整の必要性に関する意見があった。これは、同日に「看護実践研究学会第1回学術集会」が開催されていたことから、学会参加者が本研修会へ当日参加を希望した結果、予定していた3グループに急遽当日参加者を加えたことで1グループが7～8名になった結果によるものであり、今後の課題である。

また、今後の要望について専門看護師から、他部門の人との事例検討会や非がん患者に関するアドバンス・ケア・プランニングについての検討があった。

4. 企画担当の専門看護師と教員による評価会議

令和元年10月31日（木）に企画担当の専門看護師4名と教員7名で研修会の評価を行った。グループワークの状況については、グループメンバーの研修会に対するモチベーションの差が討議内容に影響するところもあったが、全体的に活発な意見交換ができたことを確認した。一方、専門看護師以外の参加者が多かったことで、本事業の目的とのずれが生じているのではないかと意見があり、専門看護師に限定した研修会を企画すべきか検討した。専門看護師にとっては、ファシリテーターとして学ぶ機会となっていたことや、専門看護師以外の看護師にとっては、専門看護師の活動を知る機会とな

り、相互に役割を確認する機会となったのではないかという意見があった。その結果、看護実践の改善・充実に寄与することが専門看護師の役割であり、専門看護師以外の看護師との事例検討会は専門看護師としての役割や活動のあり方を考える機会になっていることを共有し、次年度の研修会参加者については本年度同様に専門看護師に限定しないことを決定した。また、次年度は精神看護専門看護師の参加が得られるよう内容の検討や働きかけをすることを確認した。

5. 本年度の研修会内容のお知らせ

県内で活動する専門看護師や認定看護師に本研修会を周知し、次年度の参加に繋げることを目的に、令和元年度の研修会実施報告に関するチラシを作成した。内容は、研修会の趣旨と令和元年度の研修会及びアンケート調査結果の概要、企画者である4名の専門看護師と事業代表者の教員からのコメント、次年度研修会に向けた案内であった。チラシの送付先は県内で活動する専門看護師32名と認定看護師292名の合計324名で、令和2年2月に郵送した。

表1 研修会の内容についての意見

分類	記述	CNS
他分野の看護師と交流できて良かった	他の分野の方と交流できてよかった	◎
多分野・他施設の看護師との意見交換によって多様な視点や共通点等、学びを得た	倫理面を考えて行うことは難しいが、いろいろな考え方が広がり良かった	
	良い意見交換ができた それぞれの分野の意見が聞けて良かった	◎
	他の施設の方の意見が聞けて勉強になりました	
	いろいろな視点が出て学びになった	◎
	いろいろな視点で事例を考えることができた	◎
	様々な分野のNs.とのディスカッションで、視点が広がり興味深かった	
専門看護師として調整すべきことを明確にできた	事例検討の中でCNSとしての視点で調整すべき事柄を明確にすることができた。	◎
情報を看護に活かすための方法を学ぶことができた	症例検討シートで症例を分析できたので、よくわかった	
	4分割を使用し情報を整理し、課題を明確にし支援の方法を考えられていることを知り、勉強になった。	
専門看護師と交流することで学びを得た	CNSとの交流が持てて良かった。学びが深まった。	
	CNSの方の高度な考え方を知ることができて良かった。基本的には、我々が日頃行っていることが難しい方法でされているとおもわれることもあった。	
自由に発言できる雰囲気が良かった	自由に発言してよいという雰囲気で、安心して発言できた。	
専門看護師の活動を具体的に知りたかった	CNSが実際どのようにスタッフを巻き込み、調整していくのかという具体的取り組みについても聞きたかった。	
グループワークにおいて効果的なファシリテーションができなかった	事例提供者がファシリテーターであったためファシリテーターが大部分を話してしまいGWとしては今一つだった。	◎

IV. 教員の自己点検評価

1. 看護実践現場や看護職に与えた影響

本年度の研修会について、参加者から概ね良い評価を得られている。また、22名の参加者のうち14名が当日参加者（全て専門看護師以外の看護師）であった。これは、「看護実践研究学会第1回学術集会」との同日開催の影響もあるが、研修会テーマである倫理調整に関心が寄せられたことも当日参加につながったと推察される。また、グループの差はあるものの活発なディスカッションが行われ、研修会終了後のアンケート調査から看護を考える上で多様な視点や共通点等の学びを得られているといった意見も確認できおり、日々多忙な中で看護実践を振り返ることが難しい看護職にとって、事例を通して看護を深く考える機会となったと評価する。また、専門看護職からは他分野の看護師と交流がで

きたこと等の評価や、研修会終了後の企画者の評価会議において、専門看護師以外の看護職者とディスカッションすることで専門看護師の役割や活動のあり方を考える機会になったとの発言があり、研修会に参加した専門看護師は役割や活動の内容について考えることができたと考える。

2. 看護職の研修としての有用性

県内の専門看護師を対象とした研修会は今回が3回目である。本年度は、専門看護師4名が企画者となり研修会の内容の検討から当日の運営までを主体的に進めた。研修会の方法を専門分野を超えた事例検討としたことや、検討する事例の内容についても企画者から提示されたものであり、専門看護師の学習ニーズに応じたものであったと評価する。

一般の看護師とともに事例検討したことは、専門看護師として、実践現場の課題をどのような視点で考え解決に向けていくかファシリテートすることや、質の高い看護実践を目指してリーダーシップを発揮する機会となっており、専門看護師としての実践能力向上に寄与するものであったと評価する。

3. 本事業を通して捉えた看護職の生涯学習のニーズ

研修会後のアンケートや企画者の評価会議の意見から、今後も専門分野を超えた事例検討会を継続することのニーズはあると考える。一方、本年度は同日開催の「看護実践研究学会第1回学術集会」で他のプログラムとの重なりがあり、精神看護専門看護師の参加を得ることができなかったため、次年度は参加が得られるよう内容の検討や参加に向けて働きかけが必要である。

また、専門看護師間の交流や実践能力の向上という本企画の目的とは少し異なるが、研修に参加した実践現場の看護師からの専門看護師の活動を知りたい、交流できてよかったという意見から、研修会を通して、専門看護師の活動を広く伝えていくことは意義があるのではないかと考える。

4. 本学の研究・教育に与えた影響

過去2年間は教員が研修会を企画し、参加者を募集する方法であったが、今年度は県内で活動する専門看護師4名が企画者となり主体的に企画・運営する方法で取り組んだ。この活動を通して、専門看護師の思考や活動、さらに専門看護師が活動を充実・発展させていくためのニーズを捉えることができ、大学院の専門看護師コースの教育内容を検討する上で示唆を得た。また、企画会議や研修会参加者の発言等から、本学の専門看護師コース修了者の状況を知ることができ、これまで実施してきた専門看護師コースの教育について評価する機会となった。さらに、県内で活動する専門看護師が役割を発揮し、発展させるための大学の支援のあり方を考える機会となった。